望月(格助)の(格助)くまなき(形ク・体)を(格助)千里(格助)の(格助)ほか(副助)まで(下二・用)**眺め**たる(存続「たり」体)より(格助)も(係助)、暁近く(形ク・用)**なり**(四段・用)て(接助)**待ち出で**(下二・用)たる(存続「たり」体)が(格助)、いと(副詞)心深う(形ク・用)、

青み(四段・用)たるやうにて(接助)、深き(形ク・体)山の(格助)杉の(格助)梢に(格助)**見え**(下二・用)たる(存続「たり」体)、木の(格助)間の(格助)影(格助)、**うちしぐれ**たる(存続「たり」体)むら雲隠れの(格助)ほど、

またなくあはれなり(形ク・用)。椎柴(しひしば)・白樫(しらかし)など(形動ナリ・終)の(格助)、**ぬれ**(下二・用)たるやうなる(比況「やうなり」体)葉の(格助)上に(格助)**きらめき**(四段・用)たる(存続「たり」体)こそ(係助)、身に(格助)**しみ**(四段・用)て(接助)、心あらん(婉曲「む」体)友もがな(ラ変・未)と(接助)、都恋しう(形シク・用)おぼゆれ(下二・已)。

すべて、月・花を(格助)ば(係助)、さのみ(副詞)目にて(格助)**見る**(上一・体)もの(副詞)かは(係助)。春は(係助)家を(格助)**立ち去ら**(四段・未)で(接助)も(係助)、月の(格助)夜は(係助)閨(ねや)の(格助)内ながら(接助)も(係助)**思へ**(四段・未)るこそ(係助)、いとたのもしう(形シク・用(ウ音便))、副詞

をかしけれ。よき人は(係助)、ひとへに(副詞)**好け**(四段・已)るさまにも(係助)(形シク・已)(形ク・体)**見え**(下二・未)ず(打消「ず」用)、**興ずる**(サ変・体)さまも(係助)なほざりなり(形動ナリ・終)。片田舎の(格助)人こそ(係助)、色濃く(形ク・用)よろづは(係助)**もて興ずれ**(接頭語+サ変・已)。花の(格助)もとに(格助)は(係助)、**ねぢ寄り**(四段・用)**立ち寄り**(四段・用)、あからめもせず(係助)(打消「ず」用)**まもり**(サ変・未)(四段・用)て(接助)、酒**飲み**(四段・用)、**連歌し**(サ変・用)て(接助)、果ては(係助)、大きなる(形動ナリ・体)枝、心なく(形ク・用)**折り取り**(四段・用)ぬ(完了「ぬ」終)。泉に(格助)は(係助)手・足**さしひたし**(接頭語+四段・用)て(接助)、雪に(格助)は(係助)**下り立ち**(四段・用)て(接助)跡**つけ**(下二・用)など(副助)、よろづの(格助)もの、よそながら(副詞)**見る**(上一・体)ことなし(形ク・終)。

満月で曇りなく照らしているのをはるか遠くまで眺めているよりも、明け方近くなって、待っていた月が、たいへん趣深く、青みがかっているようで、深い山の杉の梢に見えている、(その)木の間から漏れる(月の)光や、時雨を降らせているむら雲に隠れている時の(月の)様子は、この上なく趣深いものである。椎柴・白樫などの、濡れているような葉の上に(月の光が)きらめいているのは、心にしみて情緒を理解する友達がいたらなあ、と都が恋しく思われる。

総じて、月や桜を、そう目でだけ見るものだろうか。春は家から出て行かなくても、月の出る夜は寝室の中にいながらでも(桜や月を)思っていることこそたいへん期待が持てて、趣深い。教養のある人は、むやみに風流を好む様子にも見えず、おもしろがる様子もあっさりとしたものである。片田舎の人こそ、しつこく何でもおもしろがる。桜の下に、にじり寄って近寄ってわき目もしないでじっと見つめて、酒を飲んで、連歌をして、しまいには大きな枝を、風流心もなく折りってしまう。泉には手や足を浸して、雪の上に降り立って足跡をつけるなど、全てのものを、離れて見ることがない。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/